1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2072800606		
法人名	社会福祉法人　協立福祉会		
事業所名	高齢者グループホームあずみの里		
所在地	長野県安曇野市豊科高家5285-11		
自己評価作成日	平成22年4月30日	評価結果市町村受理日	平成22年10月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://aaa.nsyakyo.or.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2072800606&SCD=320

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社マスネットワーク　医療福祉事業部
所在地	長野県松本市両島7－1　オフィス松本堂2A
訪問調査日	平成22年6月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームあずみの里では、個別ケアに力を入れて日々利用者の方々と生活を送っています。
利用者の「今」を大事にしながら、職員は「生活のパートナー」という視点を持ち、利用者の困っている所を手助けしています。職員の押し付け介護ではなく、利用者個々の声を大切にしながら、外出レク、お楽しみ会などを開催しています。又、庭仕事、畑仕事、食事作り等個々の得意分野を見つけ役割を見つけながら、利用者が生き生きと生活が送れるように職員は日々努力しています。
法人内には3箇所のグループホームがあるので、症例発表や認知症の学習会を通し意見交換を行い、お互いに刺激を受けながら向上意欲を持ち努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホームあずみの里は、北アルプスを望む梓川沿いの「高齢者総合福祉施設あずみの里」に2002年6月に設立された。「安心」「信頼」「参加」の介護を目指す法人の理念の下、地域に開かれた事業所になるよう日々取り組まれている。協立福祉会に属し、関連医療機関の医師や訪問看護による健康管理が行なわれていることは、利用者と家族の安心につながっている。菜園、花壇、金魚や亀の飼育など、我が家の延長線上の暖かい生活が送れるよう配慮され、利用者の力を発揮できる場面作りがされ、利用者の表情は穏やかである。系列のグループホーム間での職員交流や症例発表など、質の向上への意欲も高い。今後、地域住民参加による防災訓練や、利用者の重度化に伴い看取りについて検討されるなど、利用者と家族が安心して暮らせるようチームで支援に取り組まれる旨うかがった。

V．サービスの成果に関する項目(アウトカム項目)　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

ユニット名(　　)

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)		1. ほぼ全ての職員が
		○	2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
		○	3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) ＋ (Enterキー) です。〕

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関、事務所に理念を掲げ利用者一人ひとりを大切に、笑顔を多く引き出せるように毎月の部会等で意識統一をおこなっている。	母体法人の福祉宣言が玄関と事務所に掲げられ、「安心、信頼、参加」の介護をめざすことが職員に周知されている。	理念は、事業所がめざすサービスのあり方を示したものである。母体組織の理念そのままではなく、地域密着型の意義や役割を考え、実践につながるようなホーム独自の理念を、職員で話し合い作り上げられることを期待する。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域との連携では地域推進会議に参加をしてもらいながら、事業所の取り組みを知ってもらう取り組みを行っているが、地区行事参加と言う面ではできていない状況である。	管理者は地域との接点を持てるよう、地区長への働きかけや回覧板の利用など、徐々に開かれた事業所としての取り組みが行なわれている。中学生徒との交流が行われているが、インフルエンザの流行により保育園児の訪問が中止されている。	「暮らし」は事業所の中だけで完結するのではなく、日常的な地域との相互関係で成り立っている。今後は事業所での活動を回覧板に載せたり、近所の人があそびに来たり、文化祭への作品の出品をするなど、近隣の一員となるような関わりを期待する。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症講座を地域へ出て話をしている。施設での経験を踏まえ話す事で具体的な例などが話せるのでとても好評で要請も多くある。今後も力を入れて取り組んでいきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を定期的に開催し、利用者の状況･現状を報告し意見をいただきながらサービスに反映している。	運営推進会議は、家族代表、地区長、民生委員、市職員等参加のもと、昨年は2回開催され、入居者の状況報告やホームの活動報告がされた。	運営推進会議は、地域や市の理解と支援を得るための貴重な機会である。検討事項についての話し合いや状況報告のほか、避難訓練や昼食会に併せて開催するなど、利用者の状況やケアの実状の理解を得られるような取り組みを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	安曇野市との連携は地域推進会議のみとなっているため、今後は市の事業者連絡会などに積極的に参加していきたい。	市の職員は運営推進会議に出席されているが、職員や利用者との交流は図られていない旨うかがった。	介護保険の保険者である市の担当者には、利用者の問題解決のため、実態を知ってもらう必要があると思われる。市職員の研修場所としての事業所の活用で、利用者の暮らしぶりを知ってもらうなどの交流を期待する。

外部評価結果(高齢者グループホームあずみの里)

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。夜間は勤務体制･安全面から、夜間のみ施錠しているが、それ以外は行っていない。	職員は、身体拘束による弊害を理解し、拘束のないケアの実践をされていた。今後も、認知症の勉強会や研修などに参加したり、部会を通じて日頃のケアを振り返りながら、自由な暮らしを支援する旨をうかがった。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	研修会等に代表者が参加し部会、事業所内の学習会にて報告を受けている。グループホーム独自での学習会も行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会等に代表者が参加し部会、事業所内の学習会にて報告を受けている。又、グループホーム独自で学習会を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解･納得を図っている	入所時に十分な説明を行っている。又日常でも質問等聞かれた場合は、適切に答える努力をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置している。今の所家族からの利用はない。意見、不満を言いやすい環境作りに職員は努めている。	家族会が年2回開かれ、意見や要望を表せる機会作りに努めている。また家族には毎月お便りを送付したり、担当者が写真や絵、文章を記入して一人ひとりにノートを作成し、訪問時に見ていただくなど、利用者の暮らしぶりを知っていただくための積極的な取り組みが確認できた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回部会を開き職員個々の意見、提案を聞く機会を作っている。又職場内にて実践している。	協立福祉会での面接シートを使用した面談のほか、その時々で個人面談により職員の意見の把握に努めている。毎月の部会では、サービスやケアについての意見や提案がされている旨をうかがった。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境･条件の整備に努めている	方針作りなどに置いて職員個々のやりたい事、挑戦したい事を聞き、方針に組み込んでいる。勤務においては希望休を聞きながら可能な範囲で答えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人として常勤、非常勤に関係なく研修の機会を設けている。参加者は部会にて報告し、共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人グループに3箇所のグループホームがあり、毎月主任会議を持ちお互いにサービスの質の向上に努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人の希望がある場合のみだが、「お試し入所」をしてもらい、雰囲気を感じてもらう事を行っている。家族とも不安が無くなるまで話をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方が納得するまで話合うようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族の意向を聞きながら行っている。必要性を感じた場合は他職種への協力依頼も行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	グループホームあずみの里の理念にも掲げているが、職員は「生活のパートナー」として日々の関わりを行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月簡単ではあるが便りを出しながら、その中に面会をお願いする文章をいれている。又家族会を定期的に開催し家族、本人の繋がりを大事にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	毎月の外出レクなどで順番に、利用者個々の馴染みのある場所へ出かけるように心がけている。	利用者の故郷や馴染みの場所をともに訪れたり、墓参りに同行しながら、利用者が思いを表出しやすい場面作りに努められている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員は利用者の関係に気を配り、気のあう利用者同士で食事を囲むなど工夫をしている。利用者同士の会話を大切にしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームから同法人内に移った利用者は交流をしたり、職員が様子を見に行ったりしている。家族の方とも話しをするなどしている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員の押し付け介護をせず、本人の希望、意向に添いながらケアを展開している。困難なケースが出た場合は、家族も含め前向きに検討している。	担当者は、「私の心と身体の全体的な関連シート」を作成することで、利用者の把握をしやすいよう取り組み始めた。利用者が言葉にできない思いを、行動や表情から汲み取り把握するよう、本人の視点に立って話し合いがされていた。	

外部評価結果(高齢者グループホームあずみの里)

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	居室内には使い慣れた家具を置き、本人の馴染みある生活ができるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月の部会の中で利用者個々の状態を担当から報告をしてもらい、今この方に適したケアを行っているか見直しをする機会を設けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	部会の中で報告、検討する以外にも、訪問看護との連携、家族との相談を行い、その都度プランを見直す努力をしている。	介護計画は職員全体で部会で話し合い、計画作成担当者が作成している。今後も、本人と家族の要望が反映され、現状にあった計画になるよう努めていく旨をうかがった。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践･結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のカルテ記載はS･O･A･Pを導入し、プラン作成に使用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状態の変化を素早く察知して、レベルに合わせたケアを提供できるように努めている。又、ここでの生活が厳しくなった時は複合型施設への異動も視野に入れていく。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本人が安全で楽しみのある生活を送るために職員は努力しているが、地域を巻き込んだ取り組みはできていない。		

外部評価結果(高齢者グループホームあずみの里)

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族に希望を取った上で、全員毎月第1、第3火曜日に医師の診察を実施、必要に応じて医師との面談も行っている。	事業所の協力医による訪問診察が月2回、訪問看護による体調管理が週1回行なわれている。家族の希望する医療機関への受診支援も行なわれており、安心に繋がっていた。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護の時に利用者個々の状態を報告し、必要によっては受診等も行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際は、情報提供書を作成し情報交換を行っている。入院中も様子を見に行きながら早めの退院ができるように努めている。病院との連携は良好である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人･家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	レベル低下があった時は早めに医師と面談を行い、家族の意向を確認し複合型施設･同法人の医療機関へ移り変え･転院などを検討している。	従来は利用者の重度化により、医療機関や施設への転院が行なわれていた。関連するグループホームでの看取りの経験をもとに、当ホームでも重度化への支援方法について検討する旨をうかがった。	終末期支援の対応のあり方は、利用者と家族の不安のひとつである。利用者と家族の意向を汲みながら、事業所が対応しうる最大の支援方法をチームで話し合い、重度化の指針や同意書を作成されることが望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	部会の中で緊急時の対応学習等はしているが、定期的ではないため不安を感じることもある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	複合施設全体で避難訓練を実施し、職員間での役割、動きなど確認し意思統一を図っているが、地域との連携については不十分さを感じている。	複合施設全体での避難訓練は、年2回消防署の協力のもと行なわれている。ホーム独自での避難訓練の必要性も認識し、地区長と連絡訓練を行う取り組みもされている。また、地区の訓練にホームの責任者が参加するなど、地域との協力体制も築かれている。	入居者の高齢化に伴い、身体機能低下や重度化が進むことが予測され、避難訓練は時間帯や災害の様々な想定で繰り返し行うことが必要である。運営推進会議を通じ、地域住民の参加、協力を得ながら定期的に実施されることを期待する。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	部会の中で接遇に関する学習を行い、配慮に努めている。	職員は、一人ひとりを尊重し、その人らしい尊厳ある姿を大切にするよう、言葉掛けや対応に配慮されていた。今後もプライバシー保護の研修や勉強会に、積極的に参加される旨をうかがった。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員からの押し付けた介護ではなく、利用者の声を大事に日々のケアを実践している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の声を大事にし、職員はそこへ寄り添う形を取りながら、日々を送っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人に服を選んでもらいながら、身だしなみを整えている。訪問理容を取り入れ希望に添いながら行っているため、みなさん満足している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の昔好きだったものを聞きながら取り入れている。又季節に合わせた食事、地域ならではの食事を利用者の方々に教えてもらいながら、食事作りを行っている。	訪問当日は、ホットプレートによる焼きそばのメニューであった。利用者が野菜を切り、目の前で調理が進むことにより、食欲も会話も進み和やかで活気のある食事風景であった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量は常に気にしている。個々の食べられる時間を把握し量の調節をしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	火･木･土は入れ歯を使用している方全員消毒を行っている。個々の力を見ながら適切に行えている。毎日の口腔ケアは実施している。		
	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄リズムを記入し、把握する努力をしている。現在はオムツ使用されている方はいない。利用者全員が今のレベルをできるだけ維持できるように、職員は日々努めている。	トイレでの排泄やオムツをしないですむ暮らしの重要性を職員は認識し、排泄のチェックシートなどにより、個別の排泄支援が行なわれていた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	午前中のお茶時に乳製品を取り入れている。又日々のレクに体操を取り入れ、腸の動きをよくするなど工夫をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入りたい時に入る事を基本とし、職員の都合で入浴をすることは避ける努力をしている。毎日入浴をする方もおられる。	入浴は、その時々の希望を大切にした支援がされていた。入浴を嫌がる利用者には、無理強いせずくつろいだ気分で入浴できるような声掛けや、清拭などの柔軟な対応がされていた。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活の中に決まった事は無い為本人の意向に添いながら安心して休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は個々の内服に関して理解している。又薬が変更になった時は、職員間で情報の共有に努めている。本人の状態を見ながら内服中止にするなど行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	庭仕事、畑仕事、手芸など個々に合わせた役割を見つけ楽しみとして提供している。又、外出レクを行い気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	月1回ではあるが利用者の希望を聞きながら外出を行っている。又個別での外出も行っている。家族の協力も得ながら行っている。	ホームの周囲は、菜園や花壇、ゲートボールの練習のできる場所などが作られ、日常的に外出できる工夫がされている。買い物や希望に添った外出支援もされていた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	レベル的な事もあり金銭を所持することはしていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望に添いながら提供している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下には利用者の作品を展示したり、写真を飾ったりと会話が生まれる工夫をしている。	玄関や廊下には利用者の作品を展示したり、金魚や亀などの生物を飼育することで暖かい雰囲気が感じられた。中庭の花壇は利用者により花や庭木の手入れがされ、季節を感じることができた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングの他にも、談話コーナーを設け利用者同士が気軽に話が出来るスペースを作っている。		

外部評価結果(高齢者グループホームあずみの里)

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具を置き安心感を提供できるように努めている。	居室には、寝具や仏壇、タンス、写真など思い出の品が持ち込まれ、プライバシーを大切にしながら居心地の良い環境となっていた。一人ひとりの居室が、その人らしく落ち着いて過ごせるよう、配慮されていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者個々のレベルに合わせ手すりなどを設置し、できるだけ自分でできるように配慮している。		